

平成二十六年
度
国
語
問
題

監督^{かんどく}の先生の説明があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。
先生の指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

〔受験上の注意〕

- (1) 試験時間は50分間です。
- (2) 試験問題の内容についての質問はできません。それ以外のこと
で質問があれば、手をあげて先生に聞きなさい。
- (3) 先生の指示をうけてから、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号
と氏名を記入しなさい。
- (4) 解答はかならず解答用紙に記入しなさい。
- (5) 選択問題^{せんたく}は記号で答えなさい。
- (6) 字数が指定されている場合、句読点や符号^{ふごう}も一字と数えなさい。

受験番号
氏 名

□ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなもひらがなで書くこと。

人がツラナル

問二 次の熟語の二通りの読み方をひらがなで書きなさい。

上手

問三 次の文は「深」という漢字を漢和辞典で探すときの方法をまとめたものです。解答欄の指示に従って答えなさい。

「深」の音は□1□であるので、音訓さくいんで引けるが、部首さくいんでは□2□のところを引けばよい。また、総画数は□3□画となる。

問四 次の四字熟語の意味として最も適切なものを選びなさい。

因果応報

ア、物事の原因についてくわしく調べること
イ、やってみなくては結果はわからないこと
ウ、必要に応じ報告しなくてはならないこと
エ、おこなった善悪に対して報いがあること

問五 次の意味に最も近いことわざを選びなさい。

少しのもので大きな利益を得ること

ア、つめに火をともす イ、えびで鯛を釣る
ウ、いわしの頭も信心から エ、ひょうたんから駒こま

問六 上の漢字が下の漢字を修飾しているものを一つ選びなさい。

ア、読書 イ、登山 ウ、曲線 エ、着席

問七 次の□に入る漢字を答えなさい。

口 → □ → 白
真 ↓ □ ↓ 茶

問八 次の――線と同じ用法のものを一つ選びなさい。

私はジュースが飲みたい

ア、庭に赤い花が咲いた イ、よく遊ぶが勉強もする
ウ、足は痛い^が走れ^{ない} エ、彼はゲームがしたい^{そう}だ

問九 次の慣用句の□に共通した漢字を一つ選びなさい。

□が痛い □にはさむ □をそろえる □を貸す
ア、耳 イ、口 ウ、手 エ、目

問十 「進む」の反対語を答えなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サッカー女子ワールドカップで世界一の栄冠を手にした「なでしこジャパン」は、雑草軍団という表現で称賛された。けつして恵まれない環境のなかで困難を乗り越え、厳しい試合も粘り強く戦い、ひたむきにボールを追いつけた彼女らに与えられた称号は「雑草」だったのである。

① 無名の努力家や、苦労人たちは「雑草」と称えられる。抜きんできたエースなしに勝利を手にしたチームは「雑草軍団」と呼ばれる。人間が「雑草」にたとえられるとき、それが悪口であることは少ない。「雑草」は称賛の言葉である。

単に無名だけでは「雑草」とは呼ばれない。困難な環境を乗り越え、成功を成し遂げたとき、彼らは初めて「雑草」の称号を手にするのである。

では、「雑草」に対する反対語は「A 育ち」だろうか。

不思議なことに、環境をカンビし、手間を掛けて育てられたはずの高級な「A 育ち」という言葉は、本来であれば称賛されてしかるべきはずなのに、どこかネガティブなイメージがつきまとう。そして、才能に恵まれ、整えられた環境で才能を開花させたエリートたちに対してよりも、泥にまみれて花を咲かせた「雑草」に、人びとは感嘆し、惜しめない拍手を送るのである。

④ 人びとは「雑草」に惹かれ、「雑草」にあこがれる。

苦労人とされる著名人のなかにも「雑草」に思いを寄せる人は少なくない。

「メザシの土光さん」という異名をとつて有名だった元経団連会長の土光敏夫氏は、雑草精神を主張していた。「私は雑草が好きだ。踏まれても

抜かれてもまた生えてくる。あの逞しさがいい」と。

元巨人軍から、大リーガーとなった上原浩治氏は、高校時代には控えの投手で、大学にも浪人して進んだ苦労人である。そんな彼は自らを「雑草魂」とたとえた。

プロ野球の近鉄バファローズで三十七勝を挙げた大投手、鈴木啓示氏の座右の銘は「草魂」だった。踏まれても倒れてもたくましく生きる雑草を自らの理想としたのである。個人だけでなく、会社でも企業理念として「雑草のように」と掲げるところも少なくない。

それでは、人びとがあこがれる「雑草魂」とは、いったい、どのようなものだろうか。

私たちはよく、生き方について「根っこが大事」だと言う。

それでは、雑草はどのくらい大事な根っこを張っているのだろうか。春に芽吹くツクシは、スギナの胞子茎である。ツクシとスギナとは地面の下でつながっている。そして、スギナはこの地下茎を地面の下に張りめぐらせ、この地下茎から根っこを伸ばしているのである。草取りを繰り返しても、スギナが次々に生えてくるのは、スギナが地面の下に地下茎を伸ばし、張りめぐらしているからだ。

スギナとして地上に見えるのは、わずか数十センチ程度である。それでは、このスギナは、どれくらいの深さまで地下茎を伸ばしているのだろうか。

掘っても掘っても、スギナの地下茎を掘りつくすことはできない。昔の人は、スギナの根は、地獄の果てまで伸びていて、閻魔大王の囲炉裏の自在鉤になっていると噂していた。それくらい深いのである。さすがに地獄までは伸びていないが、小さなスギナでも、地下一メートルの深さまでくらは地下茎を伸ばしている。

かつて原子爆弾によってすべてを失った広島で、真っ先に緑を生み出したのがこのスギナだったという。地中深く伸びていた根茎がシエルターに入つたように熱線を免れたのである。緑が戻るまでに五〇年かかるといわれた死の大地に、その芽を吹いたスギナはどれだけ人びとの心を勇気づけたことだろう。人びとに希望を与えた、雑草の生命力の秘密は、外からは見えない深い根にあったのである。

道ばたによく生えている雑草にカラスムギがある。カラスムギは草丈一メートルくらい雑草である。このカラスムギは、「ひげ根」というひげのように細かい根っこを地面の下に伸ばしている。この細かな根っこを、すべてつなぎ合わせると、いったいどれくらいの長さになるだろうか。

一〇メートルだろうか、一〇〇メートルだろうか。

ある研究者が測つてみたところ、一株のカラスムギの根っこをすべてつなぎ合わせると、五五〇キロメートルにもなったという。これは東京から大阪の距離に匹敵する長さだから、驚きである。

カラスムギもすごいが、測つた人もすごい。まさに「根気」というべきだろうか。「根っこ」は土の中にあつて外には見えない。しかし、道ばたの小さな雑草でさえも、これだけの根っこを伸ばしているのである。

これこそが、まさに雑草の「ど根性」であり、「性根」であり、「精根」なのである。

根っこは、どんなときに伸びるのだろうか。

水を豊富に与えられた水栽培の植物は、意外に根が伸びない。根っこを伸ばさなくても、十分に水を吸うことができるために、無理して根っこを伸ばす必要がないのである。

ところが、水がないときには、水を求めて根っこは伸びる。

相田みつをの詩に「いのちの根」という作品がある。

根っこが伸びるのは、成長に恵まれた環境のなかではない。苦しいときにこそ、根っこが伸びるのである。

⑦ 干されたときこそが、植物の成長のチャンスなのだ。

江戸時代に記された本のなかの「田畑植物の喩」にこんな記述がある。

「田畑の植物は早には枯れ、雨降れば育つなり。(中略)路辺に生いたる春草は……早にも枯れることなし」

水や肥料を与えて世話をしている作物が日照りに枯れていく一方で、誰も水をやらない雑草がどうして日照りに青々としているのか、と人びとはその生命力に驚嘆した。

根っこは目に見えないが、厳しい環境に置かれたときに初めて、根っこの張り方の違いがわかるのである。誰も水をやらない雑草は、根っこを深く張っている。十分に水を与えられた作物とは、根の張り方が違うのだ。

「根っこが大事」というのは、まさにしっかりと根っこが伸びる機会となる逆境もまた、成長のためには大切なのだという意味である。

雑草はどんな逆境のなかにあつても花を咲かせる。

困難ななかでやつと咲かせた小さな小さな花。これぞまさに、雑草らしい姿と言つていいだろう。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。
(問題作成上、本文の一部を省略しています)

農園では、知能に障害を持つ子どもたちが果物や野菜や花を作っているのですが、市場には卸さずに、市民に直に販売する。この直売所のアンドレアという少年がすごかった。なにがすごいつて、その計算能力がべらぼうにすごい。客が面白がつて、果物や野菜やジャムをいろいろ混ぜて、できるだけ勘定が面倒になるように買うのですが、アンドレアくんは一瞬のうちに計算してしまふのです。ほかのことはできないかもしれないが暗算だけは計算機よりも速い。天才っているものだなと、しばらく呆然としていました。

「わたしたちの農園では、農薬や化学肥料をできるかぎり抑えるようにしています。ですから、うちの果物や野菜には人気がありますし、値段も市価より二〇パーセントは安い。それでよく売れます。ありがたい話です。けれども、なによりもありがたいのは市民の志ですね」

「……市民の志？」

「いくら安くて安全だといつても、ここサツソ・マルコーニの街は、ボローニャ市街から山（アペニン山脈）の方へ一五キロも登ったところにある。不便といえば不便です。ところが市民のみなさんはバスや車を使つてわざわざ買いにきてくださる。その気持がありがたいのです」^②

ここでサンドリさんの話をまとめると、次のようになるでしょうか。

ポローニヤ市民の何人かが社会的協同組合を結成して、なにかを作り始めたとする。すると他の市民たちは、とにかくまずお客になってあげようとするのです。^③「それは感心、寄付をしましょう」は下策中の下策、客と
なつて品物を買ひ、そのことで事業を支えてあげる。つまりこれが「共に

うのも、BOROニアではよくあること。みんな自分が暮らした街を愛しているんですね。街が自分で、自分が街なんです。

レストラン入口のドアの右斜め上に、野球のベースくらいの大きさのセラミックタイルが貼^はつてありました。見ると、セラミックの板の中央にmonteというレストラン名が焼きつけられ、それを葉書大の自画像が何枚も取り囲んでいました。自画像は署名入りです。

「それはみんな、ここで働いている子どもたちが描いたものです」

宝物でも見るように覗き込んでいたわたしに、サンドリさんが説明してくれました。

「それは子どもたちなりの宣言なんですよ」

「……宣言？」

「よくいらつしました。レストランの中で起きるあらゆることに、わたしたちは責任を持ちますと、そういう宣言です」

ドアを開けると、とてもひろい部屋で、そこが食堂でした。天井がなくて屋根がじかに見えるので、いつそうひろく感じられます。壁には黒光りした柄つき鍋が大きいから小さいのまで十数個、ずらりと飾られていて、なかなか本格的な構えです。

食堂の奥に、厨房前室と厨房、それからピザ焼き竈がこちらから奥へ順に並んでいました。前室の大きな調理台では、紙のように薄くのぼされ打ち粉をされて置いておかれたパスタの生地を、おばあさんのような容貌の少女が、丁寧に手前から巻いていく最中でした。少女の手で反物のように巻かれた生地は、隣りの男の子に渡る。彼は大きめの長い包丁を構え、大きな息を一つして気持を整えてから、細く細く切つていきました。さらにその隣りに別の少女がいて、男の子が細長く切つた麵を、横の板の上にばらばらとひろげて乾かしています。たしかに動作はのろいの

生きる」というボロニーヤ精神です。

「もらつたお金でただ生きていますというだけなら、たとえばあのアンドレアは暗算の才能を發揮はつきすることができないまま一生を終えてしまうでしょう。けれども、お客さんが来てくださるならば、彼は優れた計算係として働くことができる。つまり、お客さんが彼の才能を引き出し、彼を生かしてくださっているわけですね。朝のアンドレアはいつも上機嫌じようきげんですよ。そのかわり、山④の向こうにお日さまが沈むしずころになると、気分がどんどん落ち込んでゆく。というわけで、彼はほんとうに働くのが好きなんです。もちろん他の四十人の子どもたちにしても同じですが」

この教育農園は、いくつかの社会的協同組合と手を組んで、ボローニヤ市の芝生と樹木の管理や、電池を集めてそれを処理場で解体する仕事もしているということでした。自分たちにもできる仕事を見つけて生計を立てて、その仕事を通して「わが市街」を美しくしようとしているわけです。

教育農園を見学したあと、さらに六キロほど先の山の上へ出かけました。やがて車は、まわりから頭一つだけ抜け出たような美しい山を登り始めました。壮大な樹々の間を抜けると、緩やかな傾斜が見えてきましたが、その傾斜はすべて丹念にタガヤサレタ畑でした。その畑を縫ってさらに登ると、体育館なら二つくらい建ちそうな、ひろい芝生の平地に出ました。平地の周囲は背の低い果樹で囲まれています。芝生の向こうに二棟の農家風の建物が建っていて、そこが知能に障害を持つ子どもたちが経営するレストラン「イル・モンテ」でした。

「ここで畑作をしていた農家のご主人が、建物とこの山一つを市に寄贈したんですね。それを丸ごと、われわれが借り受けているのです」

これまで見てきたように、それが農地であれ美術品であれ書物であれ何であれ一代で築いたものを、自分が生きてきた地方自治体に寄付するとい

ですが、三人の呼吸がぴったり合つて一つになり、なんだか名コックが一人、黙々と麵を作っているような景色です。

「イタリアでは、どんな家庭にもバスタマシーンが一台くらいは備えつけられています。ここはレストランですから、マシーンが数台、あつて当然なんです。子どもたちは手で打つのが好きでしてね。それに、こういった手作業は大事なんです。自分の体がどのように動くかを知るには手作業が一番です。それに、他人の動きに自分の体の動きをどう調和させるか、それを体得するにも手作業がいい。それでここにはマシーン⑧を置かないことにしているのです」

厨房では、白い調理服に身をかためた太った少年が、バターとオリーブ油で沸き立つ厚手のフライパンに微塵切りにしたタマネギやセロリやニンジンやベーコンや鶏のレバーを勢いよく投げ込んでいるところでした。

「火に近づいちゃだめ」

フライパンの中を覗き込もうとしたら、少年が威厳のある言い方で注意しました。

「ジャンニはスパゲッティにかけるボローニヤ風ソースが得意なんですよ。このソースの作り方はじつにたくさんあって、家ごとにちがうといつてもいいでしょう。けれどもジャンニは、自分のソースがもつとも正統的なものだと思自をもっています。ソースを作っているときのジャンニに近づくと、このわたしでさえ叱しかられてしまう。気合いが入っているんです。それでは、食堂でジャンニのソースの味をためしてください」

食堂には先客がいました。穏やかな表情の中老の紳士です。サンドリさんの紹介では、紳士はボローニャ市の大きな木工場の経営者で、子どもが勤め人になってしまったのであとを継ぐ者がなく、それで工場を丸ごと市に寄付して引退したのだそうです。そして、週に一回、ここへきてジャ

ンニのソースでスパゲッティを食べるのを楽しみにしている。

「それで、ここは流行っているんですか」

サンドリさんに訊くと、答えはこうでした。

「農園の直売所と同じことです。どうせ外でパスタを食べるのならイル・モンテで食べてやろうという市民がたくさんいてくださるんですよ。ここで食事を通して、子どもたちに自信と誇りを与えてくださっているわけです。ありがたいことです」

ジャンニのソースを待つ紳士を見ながら、こう考えました。

ポローニャの人たちは、自分の得たものを街に返すことで、街そのものになっっていくのだ、と。相手が国となるとあんまり大きすぎて愛するのはたしかにむずかしい。しかし、自分の住むところなら、なんとかなるかもしれない。

(井上ひさし『ポローニャ紀行』)

問一 ― 線①「しばらく呆然としていました。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、農園で子どもたちが自分たちの力で作った果物や野菜や花を、市民に直接売っているのだ。

イ、直売所の客がわざわざ果物や野菜や花を混ぜて、勘定が面倒になるようにして買うので。

ウ、アンドレアくんは暗算だけは計算機よりも速く、面倒な勘定も一瞬のうちにするので。

エ、果物や野菜や花の生産から直売までを大人顔負けで行う、天才少年が存在していたので。

問二 ― 線②「その気持がありがたいのです」の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、不便な場所にある農園なのに安全性を評価し、わざわざバスや車に乗り買いにきてくれることに感激している。

イ、天才アンドレアくんを認めてくれて、市街から遠く離れた直売所までわざわざ買いにきてくれることに感動している。

ウ、お客となって、農園で子どもたちが作った果物や野菜や花を買い、農園の事業を支えてくれることに感謝している。

エ、市民が、値段を市価より安くして販売している農園の子どもたちの努力を高く評価していることに感銘を受けている。

問三 ― 線③「それは感心、寄付をしましょう。は下策中の下策、」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、一方的に援助するだけで終わってしまい、そこには、支え、相手を生かし共に生きるといふ精神がないので。

イ、支援だけに執心（しゅうしん）していて、お互い様であるというポローニャの精神とは、大きくかけ離れてしまうので。

ウ、寄付をするだけでは、事業の意義を考え、それを支える対策を多方面から検討する機会を持たないので。

エ、生産者から直接品物を買うことに意義があり、寄付では生産者から話を聞くことができないので。

問四 ― 線④「山の向こうにお日さまが沈むころになると、気分がどんどん落ち込んでゆく。」の理由を二十字以内で答えなさい。

問五 ― 線⑤「丹念に」の意味として最も適切なものを選びなさい。

ア、じっくりと時間をかけて

イ、あらかじめ計画を立てて

ウ、よく慣れていて上手に

エ、心をこめて丁寧に

問六 ― 線⑥「タガヤサレタ」のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなもひらがなで書くこと。

問七 ― 線⑦「たしかに」は、ア～オのどこに係りますか。最も適切なものを選びなさい。

問八 ― 線⑧「マシーンを置かない」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、手で打つのが好きな三人は、名コックのように麵を作れるから。

イ、自分の体の動きを知り、他人の動きに合わせることを学べるから。

ウ、丁寧に作った手打ち麵のほうが、味がよくお客に好まれるから。

エ、麵作りを通して、お互いに助け合うことの大切さを実感するから。

問九 ― 線⑨「少年が威厳のある言い方で注意しました。」とありますが、この威厳は、少年のどのような思いから出たものですか。最も適切なものを選びなさい。

ア、自分が作る手打ち麵に対する優越感

イ、素材を吟味（ぎんみ）していることに対する自負心

ウ、評判のよいソース作りをしている喜びと満足

エ、自分が作っているソースに対する自信と誇り

問十 本文の内容として最も適切なものを選びなさい。

ア、ポローニャの市民は、自分が住む地方自治体で働き、そこで得た収入で美術品や書物を購入し生活を楽しんでいる。引退後それらを美術館や図書館に寄贈するので街の文化的資産が充実している。

イ、後継者のいないポローニャの市民は、自分が働いて得た建造物や土地などを丸ごと市に寄付する。それによりポローニャは経済力のある市となり、人口も年々増加して繁栄（はんえい）してきている。

ウ、ポローニャの人たちは、自分の力で築いたものや得たものを、自分たちが生きてきた街に寄贈する。そのことによりさらに自分と街が身近なものとなり、街を愛して一体感を持つことになる。

エ、ポローニャの人たちは、世界が環境問題に関心を寄せる前から、無農薬栽培で安全な農園の品物を直売所で購入している。また子どもたちが経営する安価なレストランをよく利用している。

※印の所には記入しないこと



5